

「わからないから不安」を「知ってワクワク」へ

進路を選択するにあたって、新たな世界への期待とともに、不安を感じる人も多いようです。その原因のひとつは、わからないことが多い「からではないでしょうか。例えば、就職活動を始める場合など、情報の集め方や電話での話し方などで、戸惑うことも多いでしょう。留学を考えた場合でも自分の語学力の評価や留学先での暮らしぶりなどを客観的に把握するのは簡単ではありません。

ただ、こうした不安は、知ることにより、また少しずつ体験することによって、楽しさや自信へと変換することができます。就職活動なら、進路支援プログラムの中でビジネス社会の知識やルールを吸収できるでしょう。留

学なら学内をはじめ各国の大使館や文化機関で情報を集めたり、ネイティブとの交流などで一段と意欲が高まるかもしれません。

大切なのは、はじめてだから、わからないのは当たり前」と考えて、恥ずかしがらず、先生・先輩・友人・両親、進路支援センターなどに聞いたり相談したりすることです。そんな姿勢が、ワクワクしながら進路を決める近道ではないでしょうか。

進路選択は自分をみつめ直す またとない機会です

自分はどうな性格なのか？ 何になりたいの？ 何ができるのか？

およそ先輩たちが進路選択の準備段階で最も力を注ぎ、あとで振り返って、もう少ししっかりやっておけば……と後悔するのが「自己分析」です。自分の現在やこれまででできるだけ客観的に見つめ直し、長所や短所を確認しながら、自分という人間を浮き彫りにしていく作業など、ほとんどの人が未経験です。でも、これを自問自答していくうちに、確かな方向性を見出せるのも事実です。

例えば、就職活動が厳しいからと、とりあえず内定を取ることを最大の目的に活動し、とりあえず就職するケースを耳にします。ところが、自分の希望と実際の仕事のギャップに悩み、数年で転職する場合が少なくないのです。目先の損得勘定だけで進む道

進路支援レポート

はじめの一步を踏み出そう

進路支援センター所長 犬飼昭式

を選ぶのは寂しく、逆に信じる道があれば少々の苦勞も楽しめれます。その分かれ道が「自己分析」なのです。

また、活動の途中で「やはり自分が進むべき道は他にある」と確信を持つたら、進路を変更する勇気も必要です。それが、その人の「自己分析」が完結した時なのです。もちろん現実逃避の手段として進路を変更するのは無意味であることは言うまでもありません。

「先輩の活動報告」は価値ある指針

書店には多くのハウツー本や関連雑誌が並び、インターネットから手軽に情報が引き出せる中で、本学の学生が特に重視しているのが、「就職活動結果報告書」や進路支援ガイダンスでの「4年生の活動体験発表」などです。その理由は、学生生活も就職活動などのフィールドも先輩と共通点が多いからに他なりません。同じ学部先輩の体験なら、進路選択の経緯や活動の様子が、いっそう具体的にイメージできるでしょう。

それだけに「就職活動結果報告書」などは、折にふれて目を通したいものです。どうやって希望の進路を実現したのかといった手段だけでなく、思い通りに進まない時の悩みなどを綴ったものもあり、先輩たちも同じように落ち込んだり、悩んだりしたんだと思うと何だかホッとします」と感想を漏らす学生もいます。

また、先輩訪問など生の声を聞く機会があれば、積極的に参加して質問しましょう。

安易に選べば 将来が不安定に フリーアルバイター

厳しい就職環境の中で、希望する企業や職種に就けないことなどから安易にフリーター（フリーアルバイター）を選ぶ人がいます。フリーター人口は平成2年から10年間で2倍以上の417万人に達し（平成15年版国民生活白書）、社会問題となつていきます。フリーターは一見、規制や束縛が少ない「自由な職業」のように錯覚している人がいますが、「一般企業ではアルバイトを、職業（実務経験）」とはみなさず、履歴書に記入してもほとんど評価されないのが通例です。

企業にとって、フリーターは新規採用を抑制しながら、経費の安い労働力を確保する便利な一面があり、正社員並みの責任を与えて、やりがいと称している場合もあります。しかし、待遇は不安定で、10年後・20年後の将来設計を考えた時、不安にならざるを得ません。事実、フリーターの72%は、正社員としての就職を希望しているのです。

一時のぎでフリーターになっても、次年度以降、新卒者とのさらに厳しい競争が待っています。就職を希望するなら、選択肢を広げ、粘り強く活動を続けましょう。